建國童話（二）

——講習會講演速記——

久留島武彦

建國神話材料の選擇　今度は一つ斯ういふ方面について申上げてみたいと思ふのであります。

建國神話と言ひましたところで、中々材料は多いのです。天の八重雲を押開いてお降りになつてから、或はもつとその前の天地創造國土創造、といふところが相手が幼兒であります。お互ひが聽かせたいと思ふが、まだ推理能力のない、經驗を持たない子供であるから、それに對して如何に神話を語らなければならないか、彼等の頭の中に潛在した意識があると言ひながら、これに我々が無條件で古い話を聽かせて判る筈のものでないのであります。

第一國土創造、國の成立ち、丁度茹で玉子の崩れたやうにフワ〳〵して、さうして固まらない中からあしの芽が出るやうに芽か出で來た。なんて言つたところで子供にはあしが判りますまいし、それが卽ち地の始まりなんだ、と言つたところでどうして解釋出來るか、また天の浮橋の上に立つて天の瓊矛をさつて海中をお探りになつた。その天の浮橋とは舟であり、天の瓊矛とは櫂であらう。海の中をお歩きになる時にその櫂の雫の滴が落ちて島となつた。斯う言つてみたところで第一それが判らない。第一神話といふものは言語學から解釋しなければ判らない材料のものだといふことも言はれて居るし、沖野岩三郎氏が近頃盛んに神話を解釋して居りますが、沖野君も言語學の上から今まで判らなかつたと思ふところの材料を非常に鮮明にされて居る。斯ういふやうに寔に深く難しいものでありますから、それを我々が神話の中の材料だからこれも話さなければといふ捉はれた考になつては却つて神話を毒することになる。それで今日お互ひ子供に話すべき神話は國土創業の神話といふよりも、建國神話、卽ち神武の帝から始めるくらゐが丁度頃合ではないか、

卽ち神武の帝の建國創業の御事跡を子供に聽かせる。そ

の中へ我々が神話を理解して、それに心持ちを盛り添えて行く。斯ういふやうな扱ひ方が一番無難なものであり、それが皇紀二千六百年に私共が幼稚園を標準として扱ふべき材料ではないかと思ふ。ところが神武の帝の創業の御事蹟の中にも我々が困る問題が幾つもあるのであります。

例へば斯ういふ問題があるでせう。神武天皇樣は御年十五歳で皇太子の御位にお卽きになつた。卽ち天皇樣になる皇太子におなりになつた。これはよく判つたことであります。ところがお兄ィ樣がお三方おありになる。五瀨命とか稻飯命とか、兎に角、お兄ィ樣がお三方おありになつた。そのお三方の一番上のお兄ィ樣を除いたお二方は途中でお崩れになつた。その一番上のお兄ィ樣は途中の大きな戰で敵の矢に中つて、これはお死になさつた。こゝで直ぐ引つかゝる問題は、どうしてお兄ィ樣が天子樣にならなかつたのか、これは話す者が引つかゝる問題である。それでこれを相當知識ある人までが神武の帝は幼い時から御英明に渡らせられたので、お兄ィ樣に代つて皇太子の御位にお卽きになつたのであらうと、さうしてみるとお三方の兄ィさんは御英明であらせられなかつたか、お父樣の御眼鏡に適はなかつたといふことであつたならば、これは現代の子供にとつて不思議なことである。話す者からしたら少しく危險な材料ではないか。

このことを貴君方はどうお扱ひになるか、

それからまた五瀨命のお歿くなりになつた事實が大きいだけ尙引つかゝる材料がもう一つある。これは浪花の津から御上陸になつて、生駒山の麓で戰をなさつた時にお負けになつて敵の矢に中つて非常にお苦しみになつた、その時に日の御子が日に向つて戰ひをなすは宜しくないから、日を背にして戰はなければならん。これは大事な問題でありますけれ共、これをどのくらゐ子供にお話なさつて材料として消化することが出來るか、日の御子、太陽、天照大御神、その子供、その御末、斯ういふやうなお話をどのくらゐに誤らずに理解させることが出來るか、こゝに危險性があるのであります。

お日樣の子、このお日樣の子といふことを訊ねられたら我々はヘドモドしなければならん。であるから私は建國神話の中の神武天皇樣の御材料で、所謂うつひとがみ、現實の身體をお備へになり、現實に我々と同じ御生活を遊ばして居つたから話易い、理解し易い材料の下にあるのであるけれ共、その中にもまだ我々に非常に危險を感ぜしめる文學材料が多いといふことに貴君方はお氣づきでありませう。だから斯ういふことに觸れるといふことは誤りだと思ふ。

だから私は先づ建國創業のお話をされるならば日向から

御發程になつた、それから話を始めるのが一番無難ではなからうか、その御發程の材料として私が擇んだのが美々津であります。

なぜ日向から御發程にならなかつたといふことは、これはもう簡單なことで、文字に書いたなら二三行の說明で足りる。今まで日向にお落付きになつたけれ共、だん〳〵御家來が多くなつたし、それからお世話もおやきにならなければならん、御領分もいろ〳〵お廻りにならなければならん。さうして長くお廻りにならないと、言ふことを聞かない者が出來て、そこらの者が迷惑するので日本の眞ん中にお出ましになつてあちこちお世話をおやきにならうといふので日向をお發ちになつた。といふこれだけで私は澤山だと思ふのであります。それから御發程、御道程、御通過になつた御道筋、これは私は寔に仕合せなことは、この御道程には海の御道筋と陸の御道筋と二つあることであります。さうして海に御案內をした者、海の案內者、それから陸の案內者、こゝに良い材料があるのであります。こゝに今日の我々の生活、我々の東亞の聖戰、我々のこの現實のこの時局に對する責務、さういふやうなものゝ良いヒントを與へてくれる良い材料があります。卽ち我々は皇軍のために、大御稜夙を廣く亞細亞に傳へるために、我々は海の御敎導者とならなければならない。海の御案內を仕る者とならなければならない。海に擴がつて行くと同時に陸の御案內を致さなければならない。陸にも譯の判らない、いろ〳〵なあらぶる神々達も居るといふところから、これを伐り隨へ、これを押しひろげて行つて無事に御目的地に御到著になるまでの御案內をする者、この海と陸との御敎導役になつた者が、こゝに話題として取入れる必要がある。それは都合のいゝことは海の案內者には椎根津彥といふのがある。陸の案內者には八咫烏、この二人が寔に良い話題を提供して居ります。それは貴君方も御承知でありませう。美々津からあの七つ岩の間をお通りになつてお出ましになつた。お出ましになるといふと、だん〳〵だん〳〵漕いで行く內に急に海が廣くなつて、右の山蔭、左の岩蔭を御標として北へ北へとおいでになつた。さうする內にずつと廣くなつて、どちらに行つていゝか判らなくなつた。これは一寸困つたなナと神武天皇樣がどちらに行かうかなァとお考へになつて居ると、向ふから龜に乘つて來た者があつた。と斯う書いてあります。この龜に乘つたといふことを今の小賢い子供ではまた疑ふものとなる。そこで私はこれは話す者の材料の生かしやうによるものと思ふが、

「あッ、何んだらう、龜に乘つて海の中から出て來た者がございます」

と斯うお傍の者が申上げた。神武天皇樣は小手をおかざ

しになつて御覽になつて居ると
「あれでございます。あれでございます。今頭を出しましたあれでございます。」
と御覽になると、龜に乘つたやうな姿が見える。暫く御覽になつて居ると、あゝ龜ではない、丁度龜の大きさぐらゐの小舟に乘つて居るのですヨ、あれ〳〵片手で漕いで居るではないかといふ、こゝで小賢い子供の疑問を解くことの出來るくらゐの用意をして置いても宜しいと思ふ。さうして、これが漕いでやつて來た時に
「お前は何んといふ名前か」
「珍彦（ウヅヒコ）と申します。神樣の御末が、この海をお通りになることを長い間、今日か今日かとお待ちして居りましたが、餘りにお見えにならないので魚を釣りながらお待ち申して居りました。」
「お前はこの海が詳しいか」
「はい、何處に行けば船の繕ひが出來、山に良い木があるかといふことも存じて居ります。」
「それならばこちらの船に乘れ」
といふので神武天皇樣が椎の木で作つた櫂をおとりになつて
「さア、これに掴まれ」
斯ういふことは餘り部分的になるのでお話なさらなくともいゝが、船から櫂をお差出しになつたので
「ぢやア、御免被ります。」
と椎の木で作つた、その櫂を掴へて
「いゝか、しつかりとッ」
とお引きになるとピョイと飛上り、さうして神武天皇樣のお船に乘ると
「こちらでございます。これを左にさらなければいけません。こちらの島蔭に參りますと潮の瀨が軟かでございます」
「お前の名前は何んとか言つたナ」
「珍彦」
「珍彦もいゝ名前だが、椎の木で作つた櫂で船に乘つたから椎根津彦と言つたら宜からう」
と新しく椎根津彦といふ名前を賜つた。これは幼稚園の子供には餘り名前が多過ぎますと混亂を起し易いので、兎に角、お船に附いて御案内申上げたといふことに致します。
そこで私は貴君方にお考へ願ひたいのは、決して神武天皇樣が特別お賢かつたから末の弟でありながら跡をお繼ぎになつたのでなくして、これはあの時代は末子相續と申しまして、一番末の子が父の遺產を繼ぎ、父の跡を繼承する習があつた時代であります。それは皇室の御系圖を御覽になつても同じであります。綏靖、安寧、孝安、孝靈、孝元天皇、應神天皇前までは大概御歷代共、總領が決して跡を

お取りになつて居ない。次男か三男、それでお子樣がお一方ならばお一方がお繼ぎになるのが當り前でありますが、數多く御兄弟があつた場合には下の者が相續して居る。それは古い時代の生活樣式がさういふやうであつたのでありまして、我が大和民族もさういふ習慣に基いて居つたといふことが認められます。それは、あの時代は開墾といふことが自由でないので、親が子供を產みますと、親は親で元氣盛んな時代でありますから自分のところで暮しを立てますから、總領は遠くへ放し、別な所を開墾させる。ですから日向においでになりますと判りますが、高千穗から離れた所に五瀨命の御遺跡が澤山ある。さうして次男もさう、三男もさう、四男になるとお父さんも年を重ねて來るので最後に親の許に居つて親を養ひ、親の世話をやくのは末の子がやくので、親の財產なり開墾は末の子に渡す。これを末子相續說と申しまして――その後は長子相續になりましたけれ共――日本の昔は御歷代の帝王七八代までは末子相續でありました。さういふ解釋が出來るのであります。斯ういふやうな事が判らないと、神武天皇樣は四番目のお子樣でありながら皇位を繼承した譯が判らない。斯ういふことは尋常三四年の子供でも判らん、その頃は長子相續であらず、末子相續といふ。まァ斯ういふことには觸れないのが賢い。大きい道筋だけ摑へればいゝ、そこで神武天皇樣の末子相續といふことには何も觸れず、兎に角、神武天皇樣が跡をお繼ぎになつた。兄とも言はず、弟とも言はず、ただ御一諸にお出かけになつたと。そこいらはいゝ加減にカムフラージしてもいゝのではないかと思ふのであります。ですから五瀨命が敵の矢に中つて御苦しみになつておかくれになつたといふ事實、それから生駒山に於ける日の御子といふやうなことは避けた方が宜しい、そこで熊野御上陸、それから陸の御道筋になるのでありますが、まァ永い間の海の旅行であつたといふので、皆は非常に悅ぶと同時に

「あゝくたびれたなァ、隨分永い間、お正月を七つもやつたのだから年をとつたなァ、君の顏は黑いなァ」

「さういふ君の顏だつて黑いぢやァないか、君なんかは何時の間にか鼻の下に髭が生えたぜ」

陸に上ると同時に先づ皆これで安心だといふので鎧を脫ぎ、太刀を解き放ちて、あの濱邊で脚を投げ出していゝ氣持ち、寄せては返す波が脚を洗つて居る。神武天皇は

「知らん所だヨ、知らん土地だヨ、氣をつけなければいけない」

と仰せになつたが、皆は永い間の船の生活が嫌でたまらなかつたから、お吐りのお吐言に構はず、鎧を脫ぎ、太刀を橫に置いて、あゝいゝ心持ちだと伸び〳〵して、石を枕に寢る者もある。砂濱に腹這ふ者もある。ウト〳〵睡り始め

た。神武天皇樣は、これは宜しくないと思召したが御自分も急に何んとなう睡くなつてウトノ〳〵遊ばされた。その時妙に睡くて睡くて引入れられるやうになるので、あゝこれは睡つちやァいかん、どうしてこんなに睡いのだらうと、フィと振り向いて御覽になると、山と山との間、木の茂つたところから熊のやうなものが首を出してフーッと何か白い煙のやうなものを吹いて居る。それが兵隊の頭の上にかゝつて行くとグーノ〳〵と皆鼾をかき始める。ハッとお氣づきになつた神武天皇樣はお立ち上りにならうとした時に、お腰にお手をおやりになつてみると、何時そこへお差しになつて居つたか、新しい劍があつたので、いきなりその劍を拔いてサッとお拂ひになつた。さうすると今まで妙な白い氣を吹いて居つた、蜘蛛のやうなものは喫驚して山の中に逃げ込んでしまつた。逃げ込んでしまうと鼾をかいて居た兵隊が喫驚して

「あゝ驚いた」

「驚いたではない、お前達が睡くなつたのは當り前ぢやァないか、あの山の間から妙なものが毒氣を吹いて居たのだ、お前達が鎧を脫ぎ、矛を置いてあるので敵が毒氣をかけたのだ」

と言つて、ヒョイと氣がついて御覽になると、この劍、今まで私が持つて居つた劍ではないが、はてどうしたのだらうと思つて居ると、そこへ見馴れないお爺さんが

「いえ、恐れながら私が持つて參りました劍でございます。私の家にこの劍がございまして、私が昨夜夢で神樣の御末がこの濱にお上りになる、早く行つてこの劍を差上げたが宜しいといふ夢のお告がございましたので、今朝起きて直ぐこの劍を持つてお傍に參りました。

「あゝ、さうか、お前か……」

こゝで高倉下の話になるのでありまして、高倉下が天照皇大神のお告によつて、倉の棟に劍が刺つて居るから、その劍を神武天皇に獻れといふお告の話になるのですが、さうなるとまた、どうして劍が倉に倒まに刺さつて居つたのか、その劍を誰がぶつつけたのか、また判らなくなりますので、まァ兎に角、その劍をお使ひになつた。さうして大變に敵を打拂ふことが出來たので神武天皇は、これを自分が持つて居つたのでは恐れ多いといふので、これを神樣にお祭りになつた。これが石上神宮と言つて官幣大社になつて居る。日本で劍をお祭りになつたのは草薙劍をお祭りした熱田神宮と、この神靈劍をお祭りした、石上神宮。これが劍を祭つてある日本の大きいお宮、このくらゐのことは時間があり、或は子供に判るならば話しても宜しい、然し神靈劍のことなどは子供に判らんならば話さん方が賢いでせう。これなどは時間と程度によつて材料としてお使

ひになれば宜しいのであります。

それから神武天皇樣は、あゝ大きい大和、これからやらなければならんと思つて居りますと、そこに出て來たのが八咫烏。この八咫烏を貴君方は大概烏と御說明なさると思ふが、それでは私は貴君方に伺つてみたいが、熊襲と書いてあるのを熊としてお扱ひになる方がありますか、どうか、土蜘蛛を御征伐になつたといふ、その土蜘蛛を本當の蜘蛛と考へて話して居る人がありませうか、土蜘蛛は綽名であります。熊襲も綽名であります。襲族であります。これを熊や、蜘蛛と解せざるに、なぜ八咫烏だけ烏と解釋するのでせう。八咫といふのは八咫御鏡と同じ意味でありまして、八咫の「咫」といふ字は八寸といふ意味でせう。一尺に足らない八寸、然し八つの咫、これは決して寸法を示したものでなく、物の美稱であります。大きいとか、美しいとか、力があるとか、尊いとかといふ、八咫といふのは美稱であります。美しきといふ意味であります。ですから八咫烏と言つても、これは大烏とか、美しい大きい仕事をする烏とか、綽名をお呼びになつたので、これは現に御祖神と言つて下賀茂神社の御祭神は八咫烏であります。その御祭神には立派なお名前がある。建角身命といふ立派なお名前があつて、さうして神武の帝が畝傍の橿原にお落付きになつて論功行賞をなさつた時、外を護るつわものとして昔の山背、即ち山の彼方、大和から北に向つて山の彼方、そこを護つて、北の方から來るところのあらぶるものを防ぐために、そこへ落付かせた。それが、あの賀茂の流れが枝流れとなつて、二つになつて、その京都の賀茂に屋敷と地面を賜つたので賀茂の建角身命といふ稱號を持つて居るのであります。でありますから皇室の尊崇が深くて祭りと言へば賀茂の葵祭と言ひまして、祭りの中の一番豪華版であります。外國人なども斯ういふ絢爛な、斯ういふ古代な、斯ういふ文化的の祭禮の行列といふものは世界にないといふくらゐに驚くところの豪華な祭りで、その祭典によつて祭られる神樣となつて居る。この八咫烏はいろ〳〵歷史の研究家によりますと、多分黑い裝束を着けて居つたらう。我々の祖先の民族は白妙、白い裝束であります。それがどうして黑い裝束を着けて居つたか、それから山の中の御案內といふものは決して平地を通るものでない、今日こそ路は谷間であり、平地でありますけれ共、昔は一ぱいに擴がつて繁茂して居つた時代であり、殊に縱橫に走つて居る河に舟がある譯ではなし、橋がある譯ではなし、そのために却つて平野は通りにくゝそれで交通路は昔は山の頂上であります。

臺灣では今日でも交通路は山の上であります。生蕃は今でこそなくなりましたが、この山の上までは共通、敵でも味方でもお互ひの交通、山の上に行くまでは全速力これを

上つて行く、さうして山の上に行くと落ちいた。山の上は展望がきく、遠くが見える、だから迷はない。自分の行きたい方角は、東、北と屋根が續いて居る山の峯を傳はつて、山の路が判らないと木の枝に上つて道を知らしたといふ。だから日本書紀を讀んでみると「八咫烏の所向のまにまに仰ぎ視て追ふ」と書いてある。そちらの山は近いぞ、左の尾根の方に上つて來いヨといふ、それを仰ぎ視て、あゝそちらではないゾこちらの方だヨと、八咫烏に追ふて行つた。これは田舍に行つて御覽になると、例へば秩父の奥においでになると日本武尊が、この今の山梨縣から下總においでになつた時に、甲州の酒折宮にお止まりになつて、あれから秩父の山徑をお通りになつた。その間に八日見山といふ古い山がある。八日もその山の峯を御覽になつた。ごうしてあんな山の上をお通りになつたらうといふが、山の上だから通れた。武藏平野も縱横に河が流れて居つては通れない、それに蠻族は割據して、森林に入れば迷い易い、そのために山をお通りになつた。その山の上を御案内したのが八咫烏、ですから、この陸の案内者と、陸の案内の方法などは子供に話して面白い材料と思ふのです。殊に山の上は迷ひ路がないといふので山の上を擇んだといふことは良い材料と思ひます。

それに虎です。虎ほど憶病な獸物はない、これは猫族であります。あれは猛獸と言ひますがあれは非常に注意深く警戒して、決して自分から攻擊するやうなことは、餘程自分が腹の減つた時以外に、或はパッと意外にぶつかつて飛び出した時以外に、自分の方から攻擊して來ることはありません。

朝鮮に行きますと牛の首に鈴がついて居るので、その音で近寄つて參りません。また、この山の中を歩く朝鮮人は長い杖を突いて、また煙草を飲みながらスパ〳〵火をつけながら歩く、それで虎は必ず山の上を通る。さうしてこちらから音が聽えれば反對の方へ隱れる。またこちらの方に音が聽えればこちらへ隱れる。ですから山で出つくはすことは滅多ない。たゞ虎が水を飲みに行く時に、山の上に水がないから、それで谷間へ降りる。その時に咽喉が乾くので水を飲みに谷間へ降りると虎にぶつかる。この時は大概飛びかゝつて來る。

ところが、これは余談でありますが、虎の習性としてお話するのに面白いのでありますが、その時でも尙且つ人間が落ちついてさへ居れば決して虎は飛びかゝつて來ない。ここで問題は虎の尻つ尾です。あの虎がヒョつと人に出つくはした時は必ずヂッと足を揃へて睨みつけて飛びかゝるまでに一寸二三分暇があるといふ、その時にこの尻つ尾の先を見ろといふのです。これは餘程問題でありますが、この尻

つ尾の先がピリピリッとする、これは虎の考へて居る考の動きを尻つ尾の先が代表して居る。喰はうかな、飛びつかうかな、強いかな、この尻つ尾が上がるやうになると危い。これが動きながらピリピリッと動きながらチョイ、チョイッと下れば、ヂイつと睨みつけて居ると、人間の眼ほど危いものはない。別に私は虎から聽いたことはないが、ヂッと見て居る内にチョイ、チョイと下り始める。下り始めたならば腹に力を入れてウーンと押しつけて睨みつけて居ると、グッとこの尻つ尾を股の間にはさんで、はさんだ時に虎は廻れ右して逃げ出すといふのです。これがビリ〳〵動いた時にオド〳〵して居ると、この尻つ尾がだん〳〵上つて來る。これなどは虎の習性として面白いと思ひます。

話は元に返つて、八咫烏が御案内して、私が御案内すれば大丈夫でございますと御案内申上げた。ところが、これが今日まで一向傳はらないことを相濟まないと思ひまして、三四度參りまして私は檢べましたが、この大和平野に御進出になるにはどのくらゐ御苦心なさつたか、その御苦心は何處で遊ばしたか、その御苦心は準備工作であります。あの熊野の山々を踏み拓いて今の大和の宇陀郡にお入りになつたといふことは、これは容易ならざる御決心であります。陸に上つて、山の中にお入りになつてしまうと、四方にどんなものが居るか判らない、その皇軍が地理不案内の山の中に入つて四方から取圍まれたら全滅に陷り易い。それを唯一人の八咫烏の御案内でお入りになつたといふことは、八咫烏にどのくらゐ御信任があつたか、またその役目が如何に重大な役目であつたかゞ判る。ですからこの八咫烏は、かァかァこちらへおいでなさいと御案内するくらゐのものであると話をしては相濟まんものだと思ふ。

そこで奈良縣の前進據點、大和平野に御進出の攻擊據點を地圖で御説明申上げませう。これは山とごうぞお考へ下さい、斯ういふやうな關係であります。（ボールドへ略圖を書く）これが吉野連山でありまして、この奥が熊野の山々に續いて居る　それで熊野から斯ういふやうにおとほりになつて、この小山の中にお入りになつた。こゝが宇陀郡と今言はれて居ります。これだけが宇陀の盆地であります。さうして、丁度この猾（うがし）といふ土地で、兄猾（えうがし）といふ者が、神武天皇樣に御馳走申上げお弑し申さうとしたのであります。この山が宇陀の高城、これが御陣地であります。さうして神武天皇樣は

ウタノタカキニ、シギワナハル、ワガマツヤ、シギハサヤラズ、イスクハシ、クチラサヤリ、エエシヤ、オオシヤ

とお謠ひになり、その囃子言葉までお作りになつた。その宇陀の高城が要するに神武天皇樣の前進據點でありま

す。さうして、この出つぱつた高倉山に登つて小手を翳して見ると連山がある。これが龍門岳、國見岳、こちらが多武峯、天香具山、こゝで神武天皇樣の御苦心になつたことは是非子供に聽かせなければならん。そこに幸ひ良い材料があるのです。それはこの天香具山の土を取つて、それで神々にお祈りしたならば必ず戰に勝つであらうといふので、椎根津彦と弟猾を遣はして土を取らしたといふ話がある。これが子供に話していゝ建國神話の一つの材料として私はお話申上げます。

神武天皇樣は山の上にお立ちになつて遙に御覽になると、あれが龍門岳、あれが國見岳、あれが多武峯、敵はあの山々に居る。さうしてあの向ふが大和の畝傍の橿原、この平地に出るにはあれを突破しなければならんが、それにはどのくらゐの兵隊が居るか、どのくらゐの敵が居るか、これを誰かに檢べにやらなければならんが、と御心配になつて居ると御家來の中からツカ〳〵と出て來て

「どうか私をおやり願ひます」

ヒョイと御覽になると椎根津彦であります。神武天皇樣は、これを御覽になつて、

「椎根津彦、お前はもう宜い、お前は七年の間海を案内して來てくれたのだから、もうお前は充分である。それに海のことは判つて居るだらうが、山のことは判るまい」

と仰せになりますと

「いえ、それで私はいろ〳〵考へましたが、良い仲間を拵へました。おい、一寸來てくれ給ひ」

うしろに手招きした。誰が出て來るかと御覽になつて居ると髭ムシャ〳〵の眞つ黑けの男で、目は圍栗眼で、鼻は開いて、寔に坐りの惡い恐しい黑い顏をした弟猾、

「弟猾ならばこの土地で生れた者、山の案内も詳しいだらう」

「どうか御用に立ちたいと思ひますからお指圖下さい」

といふので、そこで天香具山の土を取つて參れと、斥候にお立てになつたのですネ。そこで、それでは仕度をして參りますと下つたのです。あとでは

「何んと、椎根津彦は忠義な御家來だらう、海であれほどの御奉公を申上げ、また山の中に入つては山の中の敵情偵察に出かける、偉い男だなア」と思つて居ると、大來目命といふ、この方は非常に目の鋭い方でありますが、この大來目命がフィッと高城の下を見ると、下の畦道を汚いお爺さんが雨も降らないのに蓑を着て、笠を首にくゝりつけて杖をついてトボ〳〵坂道を歩いて來る。そのあとから色の眞つ黑な婆が蓑を背中につけたまゝついて來る。變な爺と婆が上つて來る。と思ふ内にこの二人が御寢所間近に上つて來るので大來目命は、何かこれは間違ひだナと思つて

「コラコラッ、來てはいかん、來てはかん」
恐しい目を光らせたが、目が悪いか耳が遠いゝか知らん顔して居る。見るゝ、まァ何んゝいふ汚いこゝか、目腐れで目の廻りは眞つ赤、水洟をブラ下げてフラ〳〵させながら下りやうゝもしない。こゝで大來目命は聞へるやうに大聲で、
「こらッ、來てはいかんッ」
ゝいふ。さうするゝ、その年寄、手で水洟をはねたゝ思ふゝ、これはまた巧みに鼻が取れた。さうしてニヤ〳〵笑ふゝ
「私でござんす、私でござんす」
ゝいふ、
「椎根津彦でござんす、お判りになりませんか」
椎根津彦、見直して見るゝ目の縁が赤く見えるのは赤土が塗つてある。鼻は山の芋をすつてブラ下げてあるのでございます。
「あゝさうか、いや、一ぱい喰はされた、私でもだまされるくらゐだから、これなら八十梟帥もやられるだらう。そのうしろのおばゞは何處から雇つて來た」
見るゝ
「私でございます」
これが弟猾なんです。
「これがばゞか、このぢゞばゞなら敵を欺くこゝが出來るだらう」
「それではこれから行つて參ります」
ゝ御前を下つた。
その時にこの山の上に勢を張つて居ります八十梟帥（ヤソタケル）の兵七八人、寒いので火を焚かう、火を焚いては向ふから見えるゝいふので、それなら岩蔭で焚かうぢやないか、ゝひのきをこすつて原始人が火を作つたゝいふ、この話もこゝには似つかふのであります。それから火を起さうゝ、木を擇んでキユッ〳〵ゝ摩擦するゝ火が出て、皮が燃えて火を作るのであります。それからこの木を「ひのき」ゝ名をつけた。時間が空いて、子供が興味を持つて居つたら、さういふ餘談を入れても宜しい、こゝで火を焚いてあたつて居るゝ、夜中になるゝ何處ゝもなく音が聽える、おや、何んだらうゝ五六人の者は聽き耳を立てゝ中腰になるゝ、火を消さうか消さうかゝ燃えて居る火を草の中に押込め、燃えて居る木を二三本引抜いて草の中に押込めるゝ白い煙がボーッゝ立つ、氣をつけろ、氣をつけろゝ、ヂッゝ聽いて居りますゝ、軈て聽え始めたのは、ヘッ、ヘッゝいふ聲、八十梟帥の兵は弓をゝつて火打石をゝがらした矢の根を嵌めて、氣をつけろ、氣をつけろゝ言つて居る中に
「おい、心配するなッ、年寄だョ、年寄」

ヘッ、ヘッ、軈てこれが近寄つて來ると、燻つて居る木を引拔いて上に翳して振り廻すと火がボーッと燃え始めて松明となつて、二三十メートル先まで見える、それを上に指翳し、下に照し出されたのは汚い年寄、闇にも判るのは水洟をすゝりながら杖をついて、ヘッ、ヘッと上つて來る姿、

「こらッ、止れッ」

さうすると年寄は唯すくんでガタ〳〵震え始めた。一人かと思ふと一人ではない、あとから婆も見えるが、餘程狼狽えたとみえてお爺さんにしがみついて顏を蓑の中に押込んで泣き始めた。さうして

「私は下から上つて來ました」

といふ、

「當り前だ、下から上らなければ上れるか、何處に行くのだ」

「山を越えて逃げやうと思ひます」

「それならなぜ晝間逃げないか」

「晝間は戰が怖いので夜になつて上つて參りました」

腰にしがみついて婆さんは身をもだえて聲をあげてお爺さんやァお爺さんやと泣いて居る。餘りにその姿がおかしいので八十臯帥の方では腹を抱えて笑つて居る。

「何んだか臭いぞ、早く行け、早く行け」

二人は

「ごうも有難うございます」

と言ひながら燃える火の影を背中にして暗闇の中に坂を下つて行く、これを見て

「ごうだ、あんな爺でも賴りになるのか、婆は爺にかぢりついて震えて居つた」

とワー〳〵笑つて居る。一方椎根津彦は

「弟猾、お前もうまくやつたなァ、顏を俺の蓑の中に押込んでなァ、若し頰被りを取られたら直ぐ髭だらけで顯はれるのに、うまくやつたなァ」

さうして無事に天香具山の土を取つて歸りこれを神武の帝に差上げると

「いや、よくやつた。あの姿ならばこちらでも判らない」

と仰せになつた。こゝを嗤岳といふ名前で傳へられて居ります。一フィート五インチぐらゐの谷間の路で、私はそこへ行つて見て、私は面白いのでステキッでついてみました。斯うして椎根津彦がついて上つたのだなと思つて。私は弟猾の眞似をして、ヘッ、ヘッとやつて上つて行くと、昭和十五年の久留島武彦は二千六百年前の椎根津彦と弟猾になつた氣がして、なんだか、この邊がモヂャ〳〵して、あゝ愉快だなァ、我々は遠御祖の皇軍に盡した足跡を今日

まざ〳〵と踏むことが出來る。私が二千六百年前に居たならば椎根津彦であつたか、弟猾であつたか、椎根津彦が今日居つたならば、今日また私の眞似をしてステッキをついて歩くだらうと思ふと、二千六百年は昨日のやうでもあり、今日のやうでもある氣がする。斯ういふやうな解釋の下に、子供に話をすることが必要ではありますまいか、第三者にしてしまう必要はない。自分であると解釋する必要もない。兎に角、古き話に新しき心持ちを持たせるところに、この働く力がある。さうして嗤岳、斯ういふ嗤ひといふ字が使つてある。これはあざわらふといふわらひであります。だからあざわらつて

「馬鹿だなァ、俺が斥候であり、重き任務を持つた假裝武者であることを知らないのか」

といふ椎根津彦、弟猾の笑はれた嗤岳とも思へる。また

「こんな汚い爺が、婆が」

と侮蔑してあざわらつた八十梟帥の嗤ひともなる。

いづれにしてもこの字は面白い字であります。橿原にお參りになつた場合には、ぞうぞあれからお廻りになれば松坂、名張、榛原、この榛原といふ驛があります。急行だけは止りませんが、當り前の電車は止ります。榛原からは乘合バスがあります。そこからお入りになりますと松山といふ町があります。その乘合バスで猾村に行けば、兄猾が神武の帝をお招きになつて御馳走するといふ名目の下に踏落しを造つた跡がある。昔から野蠻時代には猪や猛獸を捕るには踏落しを拵へて捕つたものです。その踏落しを拵へた跡が猾村に大殿といふ字で殘つて居ります。その前に血原といふ小さい橋がありますが、これは兄猾を誅戮遊ばされた、その時に血に染めたといふので血原橋といふ。その上に山の神を祭つた古墳がありますが、その古墳はまぎれもない兄猾を埋めた古墳でありまして、それを裏書する猾神社といふ小さい神社があります。近頃では弟猾を祭つてあります。

これは餘談でありますが當時の神武天皇の御精神は、その地方に勢力を持つて居る土地の豪族などを必ず一度お招きになつて歸順をすゝめ、歸順しないことになると、初めてこれを御誅伐になつた。御誅伐になつたあとは必ずこれを踏みにじらずに神に祭つてある。これは大和民族の抱擁力といふか、同情心といふか、實にこれは祖先の解釋として非常に大きい解釋であります。一度は敵となつても、これを從へた後は——これを愛撫し、若し從はなかつたならば、これを御誅戮になつて、その後は——これを神と祭る。あの紀伊の勝浦に御上陸になると丹敷戸畔といふ者が神武の帝に叛いたので、これを御誅戮になつた。さうしてこの丹敷戸畔を神として神社に祭られた。天津神、國津神とい

ふことがございませう。國津神といふのは大和民族でない、その鄕土に居つたところの昔からの力有る者の祖先、それが國津神でありますが、大和民族は抱擁力の强い、敵の立場を認識し、まつろはざる者は討つて、これを討つたならば、これを從へて我が兄弟同樣に扱ひ、或はこれを倒しても神として、それ以外に尊敬を與へる。これなども今日では猾神社としてこゝに遺つて居ります。

それから先程申しました天香具山の土を持つて歸つて、これがどうなつたか、これが今日最も由緒ある、最も尊い、さうして上御一人の御歷代に於てこれほど大きい御盛儀はないと思はれる御卽位式の時に、これが遺つて居ります。天香具山の土を持つて歸つた、その間には敵情もお聽きになつたでありませう。敵の準備工作も檢べて申上げたに違ひない。

そこでこの土を取つて手抉(てくじり)といふものをお造りになつた。それから八十平瓮(やそひらか)といふものをお造りになつた。それにいろ〳〵のものを入れて天津神、國津神をお祭りになり、戰勝をお祈りになつた。

さうして、この德利と皿を持つて、神武の帝は皆集まれと仰せられたので、皆それ〴〵帝のあとについて行くとこの川の淵にその二つを持つておいでになつて、よく見て居れと仰しやる。

見て居りますと、山川のことですから鮎が溯つて行く「あ、鮎だ、あれは鮎だ」

「押してはいかん、押してはいかん」

「默つて居れッ、やかましい」

と部隊長に叱られて氣をつけの姿勢で見て居る。

さうすると神武天皇樣はお皿を水の中にお入れになつて

「この皿、この德利が沈んで後に魚が浮いて、木の葉のやうに流れて行つたならば必ず今度の戰は勝つぞッ」

と仰せになつた。

「さァ、大變だ、よく見て居ろッ」

皆目を皿のやうにして見て居ると、ガブ〳〵〳〵と德利が沈んで、お皿が沈んで、お皿の間を逃げ、德利の間を逃げ、魚が逃げる。浮かんゾ、浮かんゾ、見て居ると魚が浮かん。聊か心配になつて來た。魚が浮かない。見て居ると二十メートルほど下に居る二三十名の兵隊がワーッと聲を上げた。見ると白い腹を水の上に見せて流れて來た。浮いた浮いたといふ中に魚は腹を見せて木の葉のやうに流れて來る。神武天皇は

「勝つぞ、勝つぞ」

と、こゝで軍を進めて行かれた。

敵はさァ戰だといふので一生懸命防禦をやつた。その間に神武天皇樣は一隊をぐるりと後ろの方から大廻りされて

敵を左の後ろから攻めて、兩方からお攻めになつた。

その結果到頭萬歳々々、一番終ひに敵を一番强くやつつけられた時に御弓に金の鵄が來て、敵が目をあけられないほど鋭い光りを見せたので

「金の鵄ではないか、金の鵄ではないか、神武天皇樣のお弓にとまつて居る」

こゝで敵をお討ちになつて大和においでになり、橿原で御位に卽かせられたのであります。

その御戰を手抉の酒瓮で御占になつたといふので、御卽位式の時に紫宸殿の南の階の下に立てる萬歳旛の模樣に織り出してあります。この萬歳旛の下に內閣總理大臣が立つて高御座に對し、この旛竿を搖り動かして「萬歳」と言ふ。その時にラヂオで日本全國、時を合せて一億の日本人が「萬歳」と申上げる。もう一度內閣總理大臣が旛竿を動かして「萬歳」と言ふ、日本全國で「萬歳」と言ふ。三べん「萬歳」と呼ぶので、これを萬歳旛と申上げる。さうして大事な御卽位式の最後の括りをする。

その萬歳旛を御覽になりますと、錦地の中に斯ういふやうに川の波の模樣が織り出してある。さうして、その下に手抉のお德利の模樣がある。これが一番尊い御旛であり、御卽位式の括りであるとすれば、二千六百年前の菟田川で浮いた魚の印が二千六百年續けて皇軍のめでたき、皇軍の御榮えの彌ゝ益ゝ榮えさせられる御卽位式の御儀式の旛の上に皆が忘れないやう御魚の模樣がつけてあることを考へてみますと、日本は昔から今まで、何千年續かうが變らない。何萬年續かうが變らない。一つの魂、一つの心持ち、一つの力、一つの命によつて私共は固まつて居る日本人であるといふことは何んと嬉しいことではありませんか、强いことではありませんか。

斯ういふ工合に建國神話を童話化して使へるだけの範圍のものを使ふだけでも充分に五回や七回お話なさることが出來ると思ふのであります。

冀は今からでも尙遲くない。あと半年ありますから、折角この半年の間に人として子供の魂を培はれると共に、國民として、この良き雰圍氣、良き境遇、良き今の時代の波に乘つて、これを利用し、活用して皇國精神を植ゑつけて置くことも必要ではありますまいか。

大變暑苦しい間でありましたが、よく終始御淸聽下さいまして有難うございました。

〔完〕